

第八話 守銭奴のなげき

八月十八日号のある週刊雑誌に「夏休みのない青春——金につかれた当代学生気質」と題して、学資を得るための学生アルバイトの実態が、現地ルポの形で報告されていました。その中に、こんな記事がありました。面白いので原文のまま読んでみましょう。

……関西の名門K学院に学んでいるT君（二三才）は、ジャズ歌手である妹の、パトロンから十五万円を借り出し、株に手を出して大いに当てた。なんでも思惑が当たって、半年足らずで四十数万円になったそうである。すると、今まで、事業の失敗で、学費も出してくれず、勝手に学校へ行きなはれと言っていた両親の目の色が変わった。

父親がまず、息子の顔色を気にしながら、

「利子をつけるさかい、十万ばかり借してもらえんかいな。」

と申し出たというのである。T君は即座に

「あかん。絶対にあかん。コレはな妹の手を通じて借りてきた金や。日頃は薄情なことを言うて

いて、金がある時はばかり、なんや、その態度。ボクはな、この金で、仲のいいおなごと九州くんだりまで旅をして、残りは滞納している授業料にするんやぜ。」

と言ったという。さすがに息子のこの言葉は生活力を失った親父の胸には痛く響いたらしい。

激怒して、聞くに耐えない罵声を浴びせているおやじに向かい、T君は冷静に、つづけてこう言った。

「それで……父ちゃん、利息って、なんぼつけるんや……。」

もはや、この親子には救いがないうである……。

以上がその原文であります。なるほど、この親子の浅ましい姿には、救いようのないみじめさがあるようです。お金は仲連の元とはよく言われますが、金ゆえに親子の縁を切り、親と子が互いに憎しみ合って生きるという愚かな姿も、しかし現代ではあまり珍しいことでもなくなつたようです。黄金の魔性に魅せられて哀れな末路を辿る人たちのなんと多いことでしょうか。収賄議員や汚職官吏、金庫破りに、にせ金造り、はては金ゆえの選挙違反など、人間の欲望の醜さが、フツフツと音を立て臭気を放って沸立っているようなこの世相です。……いったい、お金というものは人をしあわせにするんでしょうか？ それとも不幸にするものなのでしょうか？

生活が複雑にせちがらくなつて来ますと、宵越しの金、つまりあすへのたくわえなくしては人間は不安でたまらなくなります。この未来への備えの中には、まず住居が……大家族が健康に住むに足る住居が、たとえ自分のものでなくとも、いついつ追い立てをくうかもわからぬという心配なしに確保されていなければなりません。次に愛情の絆によって自分が扶養の義務を背負った家族……年老いた両親や妻子を含む全家族の日々の食物と衣類とが十分に供されなければならぬのみならず、不測のできごと、たとえば、病氣災害などのための充分の医療費と、存分に働いた後の静かな老後の生活の安定、それは、一家の支柱である自分が突然死亡するようなことがあつても後に残された愛する妻子が路頭に迷うことなく、安心して今後の生活の手段を講ずることができるときの何がしかの資本が蓄積されていることが必要です。それらの富のたくわえが、たとえ自分の手できなくとも、勤労を提供している会社なり、あるいは国家なりが、それを何らかの保険の形でもって保証してくれるなら、それは結局富のたくわえと同じものになることは言うまでもありません。これらの未来の保証が確保されたとき、はじめて人間は、人間としての「ゆとり」を持って、安心して生活することができるようです。

第二の人間としての「誇り」を持った生活とは——たとえ、今お話し申し上げたような未来への保証が与えられるとしても、それがために、朝早くから夜遅くまで馬車馬のように働き通し

お金ゆえに、人の世に醜い争いや憎しみの絶えないのを見ていますと、ああ、お金なんていうものが世の中になければよいのに……とフトそう思いたくもありませんね。

けれど、もちろん、お金は必要なものです。現在の世界の経済機構が根本から廃止されない限り、お金というものは私たちのいのちの手段なのですから、どうしてもなければならぬことは言うまでもありません。けれど、それでは、人間は、どれほど、お金を持っていればよいのでしょうか？ 私はこちらで、一度はつきりとその標準を出してみたいと思います。

まず、結論から先に申し上げますと、人間が、人間としての、つまり人間らしい生命を生きるために充分なお金があればなりません。それ以上は、必要ではないばかりでなく、むしろ、人間を不幸にするものだという事です。

では、人間らしい生命とは、どういうものでしょうか？ 私は、これを二つに区別いたしました。よう。

第一は、人間としての「ゆとり」を持った生活、第二は、人間としての「誇り」を持った生活と。

人間としての「ゆとり」を持った生活というのは、——人間には理性があり、従って、未来を考へて生きるものです。よく、江戸っ子は宵越しの金を持たぬなどと申しますが、現代のように

て、夜帰宅して食事をすませると何をやる気力もなく、ただ眠ることしか考えられぬような生活、また、一家の主婦にしましても、掃除、洗濯、食事の準備、子供の世話、繕物などに朝から晩まで追い立てられ、疲れ果てて寢床に入ると毎日毎日が続くようでは、人間らしい精神的な生活の誇りというものがありません。人間が動物と異なっているところは、その精神活動にあるのですから、週に一度、あるいはせめて月に一、二度家族揃って楽しく愛情に満ちた団樂の一日を取るとか、あるいは夜の静けさの中で、あるいは読書に、あるいは芸術の観賞に、一生を通じて教養を高めて行く心の喜びがなければ、人間の生活とはいえないでしょう。私は、そういう生活を人間としての「誇り」を持った生活というのです。

以上申し上げたような生活が実現するためには国の統治に当たる政府の強力なすぐれた政治力に待たねばなりません。しかし、それと同時に、国民ひとりひとりの自覚と誇りと努力とが、また絶対に必要なのです。生活を合理化して体力と時間の余裕を見つけることは、少しの工夫と熱意があれば、今すぐにでもできる人がたくさんおられると思うのですが、それを、少しお金が余れば、すぐに酒を飲み、競輪や勝負事にすつてしまひ、少し時間があるとパチンコ屋に走るといふ生活を繰り返していたのでは、いつまでたっても人間らしい生活はできるはずがありません。

けれど、私は今夜は、何も生活の合理化についてお話をするつもりではありません。人間らしい生活、人間としての「ゆとり」と「誇り」とを持った生活、これは、すべての人が望み、かつそれに向かつて努力せねばならぬことであり、それがために必要な富の蓄積は、私たちの人生にとって必要なことだと言いたかったのでした。お金は、そのための手段なのです。

ですから、人間らしい生活を営むために充分なお金があれば、もうそれでいいのではないのでしょうか？ それ以上のお金が何のために必要なのでしょう。必要でないものを……それ以上の富を望むとき、実は、その時から、あなたの人生の不幸が始まるのです。

「お金の方は、もうこれでよい。後は、私の人生を深め、私のいのちを充足したものにしてください。」

と生活の目標を、もっと高い所に置き代えるという、その潮時をしらないなら、欲望というものには限りがありません。欲は欲を生み、いつもイライラとしてねたみ深く、どこまでいっても満足することを知らない。……いつかお金というものが生命のための手段であることを忘れ、お金そのものが、あたかも人生の目的でもあるかのような錯覚に陥り、お金に任せ、お金に翻弄され、お金のどれいとなり下がるのです。お金もうけと聞けば目の色を変えて飛び出して行くくせに、自分の血肉を分けた兄弟の不幸には全く不感症になり、出すものは舌を出すのもいやだと

皆様、富の与える幸福の限界を悟りましょう。しあわせとは、満ち足りたのちとは、私たちの死ぬときに、私たちに未練を持たせ、死んでも死に切れない執着で私たちをみじめに悶えさせるものではないはずなのです。

生きるためにある程度の富の蓄積は役に立ちます。けれども、富が人間の世界からすべての苦悩を消してくれるだろうなどと、富を、その力以上に買いかぶることをやめましょう。人間の苦悩はもっと深い傷跡です。その傷跡を癒すものは、もっともっと深いもの……そして、私たちのいちが求めている「しあわせ」というものが、その傷跡の痛みをもおおい包むものだとなれば、ほんとうの「しあわせ」というものも、もっともっと深いものだろうと私は思うのです。

どうやら、夜もふけて参りました。では、皆様、お静かにおやすみなさい。

いう守銭奴……生きることのしみじみとした深い満ち足りた喜びとは、そんなところにあるものではないですね。

皆様は、こんな話をご存じでしょうか？ ある食欲なおじいさん、コツコツとお金をためては、それを小判に代え、壺に収めて床下にかくしておき、毎晩雨戸を閉めてから、コツコツそれを取り出してニコニコしながら数えるのでした。が寄る年波には勝てず、老衰して、ぎょう、あすのいのちとなったとき、おじいさんは何を思ったのか、お餅屋につきたての柔らかい餅をたくさんに注文しました。ポカポカと湯気を立てている注文のお餅が届けられると、おじいさんは、ピタリと雨戸を閉めて、閉じこもってしまいました。それっきり、二日経っても三日経っても雨戸が閉じられたままなので、近所の人が雨戸を押し破って踏み込んでみようと、どうでしょう。おじいさんは、小判を一枚ずつ、柔らかなお餅にくるんでは、それを丸飲みしようとしたのでしようか、七つ目の餅が、小判もろとも、のどにつかえて死んでいたのです。死んでも小判をこの世に残す気になれず、胃袋の中につめて、冥土まで持って行こうとしたのだそうです。

けれど、お金というもののほど、薄情な友ではありませんね。元気な時は、あんなに一生けんめい大事にしてやって、お金に任せてやったのに、いざ死ぬ時が来ると、振り向いてもくれないのがお金というものです。